

(創刊：2001年8月18日)

★メディアの危機を訴える市民ネットワーク | メ | キ | キ | ・ | ネ | ッ | ト |

メール・ニュース vo.18(2)[PDF版] 発行：2005年4月23日

登録者数：375人

<http://www.jca.apc.org/mekiki/index.html>

前回に引き続いて、メキキ・ネットの総力取材による、「改変」過程の詳細の第二弾をお送りします。

今回は、DJが制作にかかわった最終版（1月24日版）から、安倍晋三氏らとの面談直前の段階のNHKによるオフライン編集版（1月28日版）までの「改変」過程です。すでにこの時点で右翼団体などからの圧力が激しくなっており、番組内容にも決定的とも言える変化が起こっていることがわかります。安倍氏らによる政治介入は、この1月28日版までの「改変」の流れを前提としつつ、これをいっそう促進させる意味を持つこととなります。

■もくじ■

1. 政治介入と番組改変 (2)

政治介入と番組改変 (2)

メキキネット事務局

《2-2. 1月24日版から1月28日版までの変更点》

1月24日に事実上DJが編集作業から降り、26日までの間に関連する全ての素材をDJがNHKに渡した。ここから、28日晚の「オフライン編集」終了までが、いってみればNHK教養部主導による番組の作り直しに相当する。ただし、純粋にNHK教養部が主体的に制作したとはいえない。この時期における政治的圧力と番組改変についての因果関係は、今のところ誰の目にも明らかな証拠が出てはいないが、分かっている事実からしても明らかに異常な番組への介入があった。

まずこの時期教科書問題などで活発に動いていた「日本会議」という全国団体が、「事前にこの件〔番組が放映されること〕を察知し」、1月26日に総務省に申し入れ行動をおこない、「小田村副会長以下の役員により、片山虎之助大臣を訪ね、NHKが公共放送としてふさわしい公正な報道を行うように申し入れを持った」（『日本の息吹』01年3月号）。『毎日新聞』（05年1月14日付）によれば、NHK幹部が片山総務相も訪問し、「番組の内容が偏っているので、放送内容を変えた」との趣旨の説明をしたというが、これと日本会議の行動との関係は今のところ謎である。

ただし 26 日晩には、「自民党の国会議員から番組へのクレームがあり、総合企画室の担当者が対応に追われている」という情報が現場にもたらされ、長井デスクは対応メモの作成を指示されている（前掲・魚住昭氏のルポによる）。したがって、この頃に議員による何らかの働きかけがあった状況証拠はかなり揃っていると考えられる。

また、その前日 25 日晩には、「NHK の『反日・偏向』を是正する国民会議」という寄せ集めの団体（代表＝西村修平）が、「NHK は ETV2001 の放送を中止せよ」というメッセージをネット上の掲示板に載せていた。

さらに 1 月 27 日朝、上記「国民会議」約 30 名が NHK に押しかけ、番組の放映中止を求めて視聴者ふれあいセンターの担当者らと約 7 時間対峙した。15 時頃には「大日本愛国党」の街宣車数台がゲートを突破して NHK 玄関まで乗り付け、戦闘服を着た党員約 20 名がセンター内に乱入して「永田〔CP〕を出せ」などと 1 時間にわたって騒ぎ、傷害事件まで起こした。

そうした状況のなかで、26 日におこなわれたのが総局長らによる極めて異例の「粗編試写」であり、28 日のスタジオ再録および秦氏インタビュー収録だった。こうしたことがこの時期に同時多発的に起きていただけなのか、因果関係があったのかについては、まだよく分からない。しかし 26 日を前後して、番組への圧力が、それまで以上に異常なレベルに達していたことは間違いない。

いずれにしても総局長試写を受けて秦氏インタビューの挿入が決められるなど、番組の構成は 24 日版と比べて、重要な部分において多くの変更があった。先にいってしまえば、V1 と V3 は全く違う内容のものになり、V2 と V4 も大きく変更された。その結果、スタジオ発言も変更せざるを得なくなった。だからこそ、1 月 28 日に町永アナウンサーと高橋氏のスタジオ再収録がおこなわれたのであり、また米国にいた米山氏については発言がカットされたり継ぎ接ぎされたりすることになったのだと考えられる。順に、主要な問題点を見ていこう。

[1] V1 と S1 における変更点

まず明白な違いはオープニング VTR(=V1)である。放映版では、第 1 夜のオープニング VTR をほぼそのまま転用していた。当日の番組の顔とも言えるオープニングをくり返すことは通常なく、いかにもおかしな始まり方だった。

一方、1 月 24 日版では、「法廷」の映像が中心的に使われ、この番組の中心軸が「女性国際戦犯法廷」にあることが明確に位置づけられていた。これは 12 月 27 日版から連続する内容だった。

したがって、DJ 降板後に V1 が「法廷」を印象づける第 2 夜のイントロ的な内容から、単なる第 1 夜のおさらいへと変わったのである。1 月 27 日版において既に「人道に対する罪と向き合う世界」と題され、第 1 夜のおさらいをすることになっているので、総局長らの「粗編試写」前後に変更されたものと思われる。

その影響はスタジオ部分に及んだ。最初のスタジオ(S1)における発言も、もともと「法廷」の映像を中心に編集されたオープニング VTR を受けてのものだった。したがって、「人

道に対する罪」を前面に押し出した新たな V1 との整合性をとるために、高橋氏が新撮することになり、また米山氏コメントの一部カットが決められたのではないかと推測できる。S1 でカットされた米山氏のコメントの主旨は、以下のようなものだった。

「最初に言えることは、アジアの各地あるいは世界の各地でさまざまな形で大勢の女性が、取り組んで来たことが一堂に会したということがいちばん大事なことだ。もう一つここで得られたことは、これまで法律の判断に委ねられなかったこと、裁けなかったことがどのように裁けるのか、どのように犯罪だと見なすことができるのかを確認できたことだ。こういうふうになれば歴史の出来事あるいは犯罪を犯した人を裁くことができるという、尺度を共有できるエンパワーメントの場だと言える。」

つまり、「法廷」を積極評価するような発言が消え去り、1月28日版以降の S1 では、米山氏は沈黙させられることになった。

[2] V2 と S2 の変更点

V2 もかなり変わった。

まず「法廷」についてのいくつかの基本情報が 28 日版までの間に消え去っていた。

「法廷」開催のきっかけとなった故・姜徳景さんの絵「責任者を処罰せよ!」、松井やよりさんのインタビューVTR、被告の権利などについて主張したアミカス・キュリーの紹介などである。このことで、「法廷」とは一体どのようなものだったのかが、ぼかされることになった。シリーズのタイトルが「戦争をどう裁くのか」だったにもかかわらずである。

さらに大きな変更点は秦郁彦氏インタビューVTR が挿入されたこと、そしてもともと「法廷」の判決を受けて述べていた内海愛子氏のインタビューVTR が V2 に移動させられたことがある（ただし 1月29日版以降は、「秦→内海→秦」と内海氏が秦氏にはさまれるかたちでインタビューが入れ込まれたが、1月28日時点では「秦→内海」のみだった）。

また、スタジオ部分で大きな変更を被ったのはやはりここでも米山氏である。

ただし挨拶しかしていなかった S1 と違い、S2 での米山氏は発言が削られたのではなかった。ここで米山氏は発言している。しかし、全然違うコンテキストで述べたことを挿入され、結果としての的はずれなコメントをしているようになってしまった。それも検討しておこう。

1月24日版までは、スタジオ収録のときの流れに沿って編集されていた。つまり V2 で「法廷」での証言を聞いたあと、S2 で高橋氏がコメントし、さらに町永アナウンサーが「米山さんはこの意味合いをどんなふうにお考えでしょうか？」と話をふる。当然、証言を聞いた後だから、そのことに話が行くだろう。事実、1月24日版までは（より正確に言えば 1月27日版までは）、証言をどう受け止めるかについて米山氏はコメントしていた。

すなわち、証言を聞いて「思わず沈黙してしまう、呆然と立ちつくしてしまう」、しかしすぐに「あなたの気持ちは理解できます」と簡単に感情移入するのも問題だ、だから立ちつくすこと自体は悪いことではない、しかしそれだけではダメで「それを引き受けて、社会の常識とかあり方を変えてゆく」ことが重要だと述べていた（詳しくは、米山氏の論考（『世界』01年7月号）を参照のこと）。

それに対し、1月28日版以降のバージョンでは、もともと「法廷」の判決、そしてそれに対する内海氏コメントを見て述べた発言が、いきなりこの場所に持ってこられた。その結果、米山氏は、証言を聞き、聞き捨てならない秦発言を聞いていたにもかかわらず、「この法廷を20世紀のフェミニズム思想の大きな流れの中に位置づけることがとても大事」と、唐突に20世紀のフェミニズムについて語りはじめるというような構成になってしまったのである。

[3] V3 と S3 での変更点

V3 も大きく変わった。

1月24日版におけるV3は、吉見義明氏によって「慰安婦」制度に軍が関与したことが示され（これは放映版でV2に移動していた）、加害経験をもつ元日本軍兵士の証言（これは1月29日版までV4に存在していた）が登場するなどの内容で構成されていた。

それに対し、DJが降板して以降のV3は、東京裁判、サンフランシスコ講和条約、日韓条約、ベトナム戦争とラッセル法廷、金学順さんらの日本政府提訴。日本政府の対応、アジア平和国民基金発足、旧ユーゴ国際刑事法廷、ローマ外交会議などによって構成されるという、まったく違うものに差し替えられた。つまり「法廷」をめぐる歴史的な流れが強調されるようなものになったのである。

おそらく、長井氏が記者会見で「歴史的な流れ」とか「世界的潮流」を強調する方向に番組を作り替える作業をしていたと言っているのは、主としてこのV3のことを指して言っていたのだろう。これだけの内容の歴史教養VTRを2-3日のうちに新たにつくったのだから、そこがとりわけ長井氏らの記憶に残り、そのため29日の試写までは「番組論」という意見になっていったのだろうと考えられる。

これだけV3が変わったのだから、当然S3も変更を迫られた。放映版までの間には、米山氏のコメント削除をはじめ、いくつかの点で変更させられているが、1月24日版から28日版にかけての変更で目立っているのは、高橋氏のコメントの変更である。

たとえば、以下の高橋氏のコメントは1月27日版にはあったが、少なくとも28日版以降では既に消え去っていた。

「いまおっしゃった、96年の国連人権委員会のクマラスワミ特別報告官による報告書、あるいは98年の国連人権小委員会のマクドゥーガル特別報告官による報告書、これを代表的なものとしまして、他にも幾つか国際機関から、いわゆる「慰安婦」問題についての、法的判断が示されてきた、基本的には、日本政府が法的責任を取るべきだという判断が示されてきたんですけども、その流れの中で、にもかかわらず、それが実現していないので、今回、市民の手で民間法廷が行われたと、そういうことだろうと思います。」

また、以下の発言のうち、【 】でくくった部分もまた、同じように消え去った。

「たしかにお詫びの発言を首相がしていますし、国民基金というものも出来ているんですけども、被害者の人達が求めているのは、国家による個人補償、ということが大きいんですよ。【ですからそれが成されない限り、お詫びをしても、言葉だけであると理解されてしまいますし、それから国民基金の方は、これは政府ではなくて、民間の募金であるということなので、被害者の人達からは、政府、国家が責任を免れるためのものではないかというふうに理解されているわけですね。国家による補償ということが成されない限り、納得が得られないということだろうと思います。】」

共通点は明白である。日本政府の責任や補償について論じた部分が削られている。「世界的な潮流」「歴史的な流れ」も、日本の責任の一手手前でせき止められてしまったのである。

[4] V4 と S4 の変更点

V4 において異なる点は、大きく二つある。

まず、1月24日版では内海愛子氏のインタビューが V4 の位置にあった。これはある意味当然である。内海氏は「法廷」の判決を聞き、その直後に会場でインタビューを受け、「法廷」の意義について語っていたのだから、V4 がその流れからすれば自然な位置であろう。それが1月27日版の時点では既に無くなり、V2 に移動させられている。

内海氏の代わりに入ることになったのは、海外メディアの反応である。スペイン TVE、韓国 KBS、ADR ドイツテレビ、オーストラリア放送協会の映像が使われることになった。

こうした V4 の変更を受け、S4 も変わった。

まず高橋氏は、新たに「人道に対する罪」をめぐるコメントを撮影せざるを得なくなった。

次に、米山氏の発言が削られ、また歪められた。判決を受けて述べた、以下のような主旨のコメントがまず消えていった。

「判決で示された正義が実現されるためには、いま現実に存在する差別や不均衡を変えて行く社会変革なしには行えない。法の判断を生かすには社会変革が必要である、という司法のあり方を示した。従軍慰安婦制度が国家犯罪であったこと、責任者の処罰や補償の義務が果たされてこなかったことが公に明記されること、そのこと自体に大きな価値がある。」

次に、1月24日版では S3 に入っていた以下の発言 A と、S4 に入っていた発言 B のうち、【 】内の発言を削除した上で結合し、S4 に挿入された。なお、放映版では《 》内も削られた。

A 「《法廷が和解を前提としたものではない。和解を予め目指したものではない、ということが大事だと思うんです。》 やっぱり和解というのは、取り返しよのない、償い

ようなない過去にどう向き合うかというときに、解決しようのない問題がそこにあるにもかかわらず、どこか、暴力を受けた側と、暴力を加えた側が、一気にその大きな深い溝を、越えられるはずのない溝を、越えてしまうんだ、越えてしまおう、という意図があると思うんですね。【ですから、法廷がそうした和解を前提としていないということは、ある意味では、元々、ここで法的な判断が下されようとしている行為ですね、裁きが下されようとしている行為、それ自体が恐らく、和解などというものは、到底許されようのないものだ、それほど償いきれないものだ、謝罪しきれないものだ、ということをおある意味でかいま見せているのではないかと思うんですね。】

B 「やはり、歴史の中で生まれてきた大きな溝は、決してそう容易に埋められるものではない。で逆に、同じ女同士だからという形で、簡単に連帯してしまわないということですね。同じ女性同士でありながらも、越えられない様々な、歴史によって形作られてきた位置の違い、体験の違い、権力的位置の違い、そういったものがあるのだと、そういう認識の上に立って、そしてさらに、どうやってその中から連携を生み出してゆくか、そういう問いに対する答えだと思うんです。」

米山氏の「裁き」の意義を述べた発言が消され、「溝」ばかりが強調されるような発言になってしまったのである。

以上、相当細かく見てきたが、この段階で番組の構成がかなり大きく変動したことが分かる。DJ 降板以降、29日の局長試写までの間は、構成の次元で大きく番組が変えられたとすれば、29日の局長試写以降においては、構成はさすがに手直しできず、比較的手の加えやすいナレーション部分を徹底調整するとか、場面を丸ごと削除するとか、そのような泥沼のようなやり方で番組が骨抜きになっていったと考えられるのである。

後に BRC に「放送倫理違反」と判断されることになる米山氏の発言の改変をはじめとした番組の作り直しは、26日の総局長試写をめぐる疑惑とともに考え合わせても、明らかにこの段階において「番組論」の範囲を大幅に逸脱するものだったといえよう。

[2-3 およびまとめは次号以降に掲載します。]

★ご意見、ご感想、ご投稿をお待ちしております。

800字にまとめて、タイトルを添えてお送りください。

匿名希望、字数については、ご相談ください。

宛先 mekikinet-owner@yahogroups.jp

(18号編集担当・駒込 武)

発行 = 2005年4月23日

発行所 = メキキ・ネット事務局

ホームページ : <http://www.jca.apc.org/mekiki/index.html>

電子メール : mekikinet-owner@yahogroups.jp

F A X : 020-4666-7325